

35. 天正伊賀の乱

今から400年以上前（安土桃山時代）に、織田信長の次男、信雄が伊賀の地（現在の伊賀市と名張市を合わせた地域）を支配しようと侵攻したことに對して、伊賀の国人（地侍）たちが結束して戦った出来事を「天正伊賀の乱」といいます。

当時、伊賀地域は有力な守護大名や戦国大名の支配を受けず、国人（地侍）たちが協力しながら自治の生活を送っていました。そこに織田信長は「天下統一」をめざす中で、この地域を自分の勢力下に置こうと攻め込んできたのです。

1. 織田勢の侵攻

(1) 第一次天正伊賀の乱

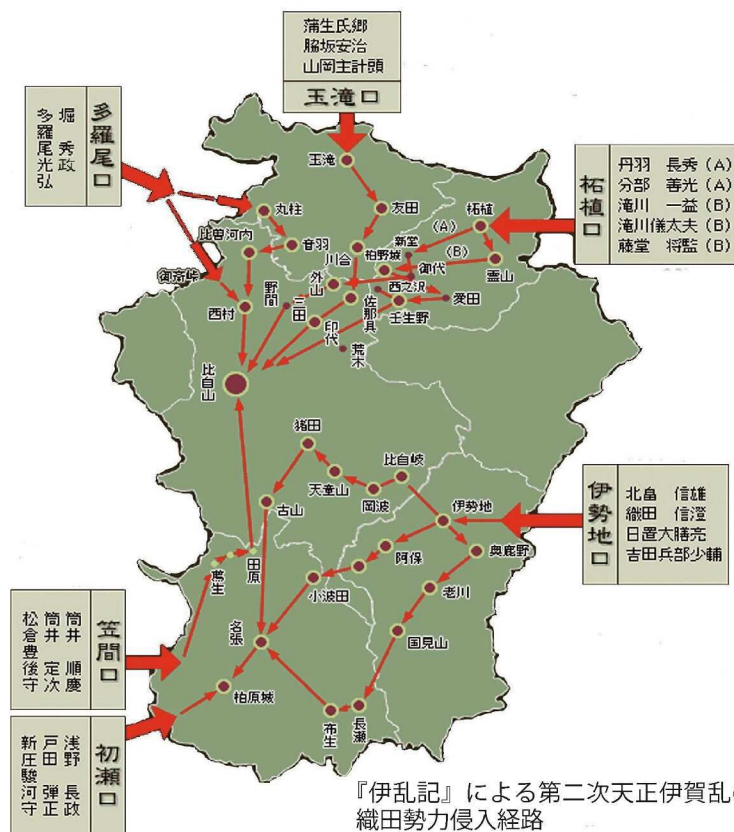
1578（天正6）年信長の次男信雄は、部下に命じて神戸（伊賀市）に丸山城を築かせて伊賀侵攻の機会をうかがいます。しかし、伊賀の国人たちに完成近くの丸山城が奇襲攻撃を受けたため、部下たちは逃げ帰りました。翌1579（天正7）年、信雄は今度は自らが伊勢地口（伊賀市）など三方から約1万の兵を分けて攻め込みました。しかし待ち構えていた伊賀衆の激しい攻撃を受け、再び退きました。この出来事を第一次天正伊賀の乱と言います。この失敗で信雄は、信長から激しく叱られました。

(2) 第二次天正伊賀の乱

1581（天正9）年9月、織田信長は信雄を総大将にし、総勢4万4千余りの兵を伊賀の地に送って、本格的に侵攻しました。今回は、戦国武将も多数参加させ、戦いに臨みました。

對する伊賀の国人勢力は、戦える百姓も含めて3千人とも5千人ともいわれています。人数の上でも戦術の上でもすべてに不利な状況でした。

織田軍勢の侵入経路は右図の通り、伊賀北部（滋賀県・亀山方面）から三か所、東（伊勢・松阪方面）から一か所、南西部（奈良県方面）から二か所でした。



『伊賀記』による第二次天正伊賀の乱の織田勢力侵入経路（名張青年会議所ホームページより）



郷土を守ろうと大軍勢に對抗し、その犠牲となった多くの人々を偲ぶとともに、ふるさとを復興していった幾多の先人たちの心意気、再び戦乱のない時代を自分たちで創っていくという決意を込めて、有志グループが「天正みだれ太鼓」をつくり、活動をしています。

天正伊賀の乱 【→P7,44】

伊賀北部の国人（地侍）たちは、侵入してきた約2万人の織田軍に苦戦し、比自山砦（伊賀市長田）へと後退していきました。

織田軍は比自山砦の周辺を取り囲みました。砦には百田藤兵衛ら有力地侍、百姓、女、子どもを含む約3千5百人が立てこもり戦いました。大きな損害を織田軍に与えましたが、最後には織田軍の攻撃におされ、国人（地侍）たちは赤目町柏原にある柏原城（別名 滝野氏城）へ集結していきました。

織田軍は奈良県側から侵攻した兵と比自山砦を攻めた兵力とが合流して、柏原城へと向かいました。彼らは行く先々で神社、仏閣などを焼き払い、抵抗する者はことごとく殺害しました。その数は数千人とも数万人とも言われています。



天正伊賀の乱を伝える記念碑（柏原の勝手神社）

2. 柏原城 落城

柏原城は伊賀に唯一残された抵抗の拠点になりました。ここには伊賀の国人で柏原城の城主、滝野十郎吉政を中心とする総勢1千6百人余りの国人（地侍）を中心に、百姓、女、子どもも含め全員討死を覚悟して籠城しました。織田軍はすき間なく包囲し、その上で総攻撃をかけましたが、自分たちに多くの戦死者が出たので一旦引き下がりました。次に、信雄は攻め方を変え、相手の食料補給の道をたつ「兵糧攻め」を命じました。そのうちに奈良の大倉五郎次が、籠城している人々の命と引き替えに降伏を提案し、双方ともにこれを受け入れ、第二次天正伊賀の乱は終わりました。

しかし、その翌年、本能寺の変で信長が亡くなったことを知った伊賀の国人（地侍）たちが、柏原城を夜襲などで取り返しました。織田軍は兵を集めて、陣地を造って戦い、城は再び織田軍の手に落ちました。これが第三次天正伊賀の乱といわれています。

この乱により、伊賀国内の国人（地侍）たちは解体され、新しい支配者のもとに仕えることになりました。

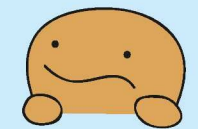


柏原城（勝手神社の裏手側150m北東に位置する）



- ・最終決戦地 柏原城に行ってみて、中世の城のつくりや工夫を観察してみましょう。
- ・名張には中世の城が100近くあったとされています。調べてみましょう。
- ・伊賀の国人（地侍）と忍者の関係を調べてみましょう。

天正伊賀の乱で多くの死傷者が出たので、柏原では「ちまきを作ると赤く染まる」という言い伝えが残っています。また、赤目町では信長を倒した「明智（光秀）さんにお灯明をあげる」と言ってお盆に軒先の提灯に火をともすという風習が続いていました。



ちまき 【→P22】